

高養研

発行 北海道高等学校養護教諭研究会
事務局 北海道札幌月寒高等学校

〒062-0051 札幌市豊平区月寒東1条3丁目1-1
TEL 011-851-3111 FAX 011-851-3112
<http://koyoken.sakura.ed.jp/myks/hyousi.html>

北海道高等学校養護教諭研究会第39回研究協議会報告

令和6年7月30日(火)・31日(水)に、かでの2・7(札幌市中央区北2西7)で、北海道高等学校養護教諭研究会第39回研究協議会を開催しました。全道各地よりお集まりいただいた会員の皆様と、夏休みのひと時、2日間にわたって学ぶことができました。

1日目の講演1では「不登校ー子どものところと親の支援ー」と題して、伊藤美奈子氏(奈良女子大学大学院 生活環境科学系 臨床心理学領域 教授)にお話をいただきました。

子どもたちの声を聴き続けた豊富な経験と資料を基に、不登校の子どもたちの思いを理解したり、子どもを支える人(保護者)を支えることの大切さを知ることができました。増え続ける不登校への対応に苦慮している学校も多く、対応の参考になったのではないのでしょうか。参加者の皆様からは「先生のお人柄がオンラインの画面越しでも伝わってきた」「励まされた」とのお声をいただきました。



2日目は玉川進氏(独立行政法人国立病院機構 旭川医療センター 臨床検査科部長)による講演「応急処置アップデート」でした。プログラムやバクスミーなどの薬剤投与の実習の後、冷却の効果、頭部打撲、腹部外傷、熱中症の処置など事前の質問に答える内容について、多くの事例をもとに解説していただきました。「実技がたくさんあったので、使用のイメージが付きやすくとてもわかりやすかった。」「根拠についての説明もシンプルにわかりやすい言葉で教えていただけたので、勉強になりました。」などの感想も寄せられた他、スピード感のある講演にドキドキした方も多かったようでした。



午後には、北海道遠軽高等学校の養護教諭 石川かおり先生による研究発表「生徒健康診断等の業務の見直し～ICT活用による効率化～」と、北海道教育庁学校教育局 健康・体育課 健康・体育指導係 係長 篠原弥智氏による助言・情報提供「学校保健の課題とその対応」と題してお話をいただきました。

ICT活用については、各校それぞれの情報交換もできて、参加者の皆様からは「教育資源がそれぞれ異なる中で、何ができるかを考えていかなければと思いました。」「ICTに苦手意識がありますが、まずは“やってみる”が大事ということなのでやってみたいと思います。」と、前向きな感想が多いのも印象的でした。



北海道高等学校教育研究大会第39回養護部会のお知らせ

【主 題】 現代的な健康課題の解決に向けた学校保健活動の推進をめざして

【日 時】 令和7年1月9日(木) 9:20～

【場 所】 北海道立道民活動センター かでる2・7

【参加申込】 当日受付も可能ですが、資料等準備の関係上、なるべく事前申込をお願いいたします。

【日 程】

9:20 9:40 9:50 11:10 11:50 12:10 13:30 15:30 15:40

受付	開会式	研究発表	助言 情報提供	総会	休憩	講演	閉会式
----	-----	------	------------	----	----	----	-----

【連 絡】 講演のみオンラインとなります。会場で配信しますので、会場にお越しください。

【内 容】

講演

「市販薬乱用の理解と支援－「助けて」が言えない子どもたち－」

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部 心理社会研究室長
嶋根 卓也 氏

「めじOD 学校嫌 全部嫌」「レタス5t追い焚き」…スマートフォンに表示されたメッセージを眺めても、容易には理解できません。「めじ」「レタス」は、特定の市販薬の名前を意味する隠語であり、ODは過量服薬を意味するオーバードーズ(Over dose)、追い焚きは効果を維持するために薬剤を追加して服用することを意味しています。つまり、いずれも市販薬の乱用を連想させるような書き込みです。子どもたちにとって身近なSNSでは、こうした書き込みが連日のように投稿され、市販薬の乱用に関する情報の発信源となっています。

近年、若者を中心として、咳止めや風邪薬などの市販薬の乱用問題が社会問題となっています。医療現場では、市販薬のオーバードーズによる救急搬送、乱用を繰り返すことによる依存症が増加しています。この講演では、若者における市販薬乱用の実態を理解するとともに、教育現場でできる予防や支援について養護教諭の先生方と一緒に考えていくことを目的としています。



〔プロフィール〕

1974年生まれ。薬剤師、医学博士(疫学)。東京薬科大学薬学部卒、順天堂大学大学院医学研究科修了。全国の中高生を対象とした薬物乱用に関する疫学調査等を担当するほか、青少年向けの薬物乱用防止教育、教員向けの研修会講師、保護者向けの啓発パンフレットの編集委員も務める。近著として、『「助けて」が言えない子ども編』(こころの科学、2022年)(分担執筆)がある。依存症から回復しやすい社会づくりを目指している。

研究発表

「Covid-19の5類感染症移行後の胆振・日高地区における感染症流行の動向と感染症対策、教職員・生徒の意識の変化について感じる事」

北海道穂別高等学校 黒原 有香
北海道室蘭東翔高等学校 中田 結子

今回の発表は、令和5年1月に開催された胆振管内高等学校研究会養護教諭部会胆振日高地区合同研究協議会での日常の執務における実践交流・情報提供で胆振・日高管内の会員の皆様に作成してい

ただいた「感染症の流行状況と感染対策」の資料を原版に作成しました。

令和5年5月8日よりCovid-19は「新型インフルエンザ等感染症（2類感染症相当）」から「5類感染症」と位置付けられたのに伴い、学校保健安全法施行規則を一部改正する省令が同日より施行されました。第二種の感染症への追加、出席停止の期間の基準の設定、出席停止措置の取り扱いに関する留意事項等が設けられました。（5文科初第345号、令和5年4月28日 文部科学省 学校保健安全法施行規則の一部を改正する省令の施行について（通知））マスクの着用も個人の主体的な選択を尊重し、個人の判断が基本となり、また人々の交流が再開されたことで昨年度はインフルエンザやその他感染症の流行も見られました。胆振・日高地区の紹介もさせていただきながら、昨年度の感染症の動向、教職員・生徒の意識の変化について感じることをお伝えできればと思っております。

助言・情報提供

「学校保健の課題とその対応」

北海道教育庁学校教育局 健康・体育課 健康・体育指導係 係長
篠原 弥智 氏

～会員だより～「北海道高等学校養護教諭研究会に参加して」

北海道岩見沢農業高等学校 川本 花菜 先生

本研究協議会を通して、養護教諭の役割が多岐にわたること、日々の生徒対応の重要性を改めて実感しました。

伊藤先生の講演では、不登校の子どもたち、保護者の気持ちや背景についてわかりやすくお話しいただきました。不登校の子どもたちに対する対応の難しさ、また彼らを支える保護者や教職員を孤立させず、チーム学校として皆で一人を支えることが重要だと感じました。

玉川先生には、基本的な応急処置や、熱中症への対応、疾患や重篤なけがへの対応について、根拠とともにわかりやすくご講演いただきました。特にプログラムの実演では、実際やってみたことで色々発見でき、とても勉強になりました。

遠軽高校の石川先生の研究発表では、ICT活用について他校の状況を知ることができ、本校でも取り入れたいと思うことがいくつもありました。グループワークでも、他の先生方のICT活用において実践したいこと等を聞けて、色々な可能性があるな、と話をしていてとても楽しかったです。

今後も、生徒一人一人への対応を丁寧に行えるよう、今回研修会で学んだことを生かしていきたいと思います。今回は、研究会を開催していただき、ありがとうございました。

北海道追分高等学校 菅原 愛莉 先生

初任者段階研修が終了し、全道の養護教諭と関わる機会が減る環境でよいのだろうかと考えようになりました。改めて情報交換の機会を得ることの大切さを感じ、本研究会に再加入しました。

児童生徒の健康・安全のために今できることは何か考えながら、研究協議会に参加しました。

不登校では、生徒と保護者の思いについて知ることができました。不登校の理由を追及せず、不安を抱えながらも少しずつ前を向けられるような関わりが大切だと感じました。

応急処置の実技研修では、現在行っている手当ての根拠を確認でき、学び続けることの大切さを実感しました。事故防止に向けて、校内研修で取り入れていきたいと思っています。

実践発表では、ICTの活用について情報交換しました。少しのアイディアで、仕事の効率化が図れることを学びました。自分なりに工夫して、保健室経営に活かしていきたいと思いました。

学校保健の現状と課題については、暑さ対策が取り上げられていました。活用できる環境を工夫し、快適な学習環境確保に向けて、学校薬剤師からも助言を得ながら進めていきたいと思っています。

今回の研究協議会では、多角的・多面的な学びを得ることができ、1人では抱えきれない課題の解決に向けたヒントを得ることができました。自校でも学びの共有を続けていきたいと思っています。

【全国養護教諭連絡協議会 第26回研修会 参加報告】

北海道札幌手稲高等学校 山田 美香 先生

今年の夏休みは、生徒の来ない静かな保健室で興味深い講演4本を集中して視聴する機会をいただき、有意義にアップデートした気分です。

「明日から役立つ！保健室で行う判断・アセスメントのコツ」（千葉市立青葉病院 総合診療科、千葉大学大学院医学研究員 診断推論学 廣瀬裕太氏）では、『「どうせコレだろう…」という認知バイアスによる判断エラー』の話に「ある！ある！」と大きく頷き、「症状を半構造化してイメージしやすくする問診のコツ」を普段の自分の問診を振り返りながら聴かせていただきました。

「下痢を伴わない腹痛を安易に胃腸炎としない」「急性虫垂炎の可能性は常に念頭に置く」「睡眠の質低下は不定愁訴の原因（不定愁訴の訴えに対して睡眠状況を聞くことが大事）」「扁桃周囲膿瘍の症状（こもったような声質、口がうまく開かない、唾液を飲み込むことができず吐き出している、口蓋垂が偏移している）は窒息の危険があるのですぐに受診する」などの注意点も今後に活かします。

「児童生徒のメンタルヘルス」（奈良県立医科大学精神医学講座 岡田俊氏）では、特に発達障害について、当事者の視点での困り感や不適応行動の理由などのお話が大変勉強になりました。発達障害の診断が意味することについては「発達障害の特性を見るというだけでなく、困難があるかを確認することが大事」とのことで、『特性はあるが困難はない』と『特性のわりに困難が大きい』のように同じ特性でも困難さは人それぞれなので、本人の話をよく聴き、その人にとって必要な支援は何なのかを個別に考える」という思考を習慣化したいと思いました。

「養護教諭の役割は、『安心できる場所をつくってあげること』だが、『その保健室の役割が他の教員に理解されていること』も重要」というお話も印象的でした。

北海道札幌丘珠高等学校 登 祐希 先生

全養連第26回研修会を視聴しました。配信期間が令和6年8月9日から9月20日までのWEB開催で、4名の講師による講演でした。

「勇気づけと承認のコミュニケーション」と題した三浦将氏の講演では、傾聴の基本から極意等について聞きました。ダメ出しの影響というのが興味深く、直接相手にダメ出しを行うことで処理能力や思考力が約60%低下、集団に対してのダメ出しやそれを目撃するだけでも40%近い処理能力・思考力が低下するとのことでした。本人だけではなく、周りへの影響も大きいことから、ネガティブなダメ出しではなく、ポジティブなフィードバックや勇気づけが相手の能力も引き出すことができることを改めて学び、日頃の生徒対応にも生かしていきたいと思います。

また、傾聴力が人間のレベルを上げていくという言葉が印象的でした。自己理解をして他者理解をすることでより高い解と一緒に作る＝コミュニケーションであり、そのために一番大切なことが傾聴をすることである。とのお話でした。

「始まりは子供から」と題した日本薬剤師会常務理事の富永孝治氏の講演では、学校薬剤師として日常の学校との連携について、コロナや災害・新たな健康教育について聞きました。

日頃の連携については、オーバードーズ（OD）が昨今の話題になっていますが、各校でODについても講演をされているそうで、専門的立場から薬教育とODも含めた薬物乱用防止教育を区別した講演や、TTで授業に参加している活動内容、環境衛生検査や執務の相談の他にも積極的に学校教育へ協力していただけることを伺い、本校でも今以上に連携していきたいと強く思いました。

どの講演も日頃の執務に活用や見直す機会となる内容や、なかなか聞くことのできない講師の方々のお話を聞くことができ、充実した研修を受けることができました。